

# 実践レポート / 探究の窓

VOL.11

本格実施から丸4年が経った「総合的な探究の時間」。  
現場で試行錯誤が続くなか、  
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

## 大学や企業と連携した

## 「探究×DX」で、

## 将来に活きる学びを

富士東高校（静岡・県立）

### School Data

1978年創立 / 普通科 / 生徒数  
521人（男子272人・女子249人）  
／進路状況（2025年3月卒業）大学  
190人、短大5人、専門学校6人、就  
職0人、その他6人

DXハイスクールとして  
「探究×DX」がスタート

富士東高校では、「しのため探究」と称した探究学習に取り組んできた。大学進学を目指す生徒が多いなか、「大学での学びや研究の助走となるよう、アカデミックな探究学習を意識してきた」と副校長の

### 年間スケジュール（普通科）

1年

#### 探究基礎力を身につけ、 個人探究に取り組む

探究の手法を学びつつ、年6回の「生成AI講座」を受講。大学生アドバイザーのサポートを受けつつ、自分の興味・関心からテーマを定め、問いを立て、作成した「探究計画書」に基づき探究を進める。

2年

#### 社会の課題を見つけ、 仲間と共に探究に励む

興味・関心が近い仲間と共に、グループ探究に取り組む。テーマ決めから成果報告会での発表まで、チームで協働する。年3回の「DXセミナー」も受講。最先端のDX技術に触れ、社会についての理解を深める。

3年

#### 2年間の学びから、社会に どう貢献するかを考える

2年間の学びを踏まえ、自身の進路に向けて探究を進める。どの大学・学部で何を学ぶか、大学卒業後にいかに社会と関わるかを深め、進路決定につなげる。



DXハイスクール事業の主担当を務める、副校長の熊谷 仁先生。

市に工場のあるNECプラットフォームズに協力を依頼したところ、快く受け入れていただきました。

こうして2024年度からは、NECプラットフォームズによる「DXセミナー」がスタート。年3回、2年生の総合的な探究の時間を使って行い、生徒はDXとは何かといった基礎や、顔認証や生成AIツールなどの最先端のDX技術について学び、工場見学にも訪れた。

#### 旭化成の協力を得て、 「生成AI講座」を開講

同時に進めたのが、旭化成と連携した「生成AI講座」の構築だ。社会において生成AIの利用が広がるなか、「高校でもリテラシー教育が必要だ」という課題意識はあったが、適切に教えるノウハウがなかった」と熊谷先生は振り返る。

「生徒にアンケートをとったところ、1、2年生の約3割が学習において生成AIを使っていました。便利なツールですから、生徒は探究でも使うようになるでしょう。そして、社会に出れば、使いこなすことが求められるでしょう。それならば、使うなど禁じる指導ではなく、正しい使い方、より便利な使い方を学んでもらい、道具として使いこなせるようになってもらおうかなと考えました。半ば飛び込みのお願いを受けていただいた旭化成には、感謝しかありません」

約1年の準備期間を経て、2025年度から旭化成による「生成AI講座」がスタート。1年生を対象に総合的な探究の時間のなかで年6回開講し、最初の4回

熊谷先生。静岡県立大学と連携し、大学生アドバイザーに授業に入ってもらったり講義してもらったりすることで、大学の研究の一端に触れるといった取組もしてきた。2024年度からは文部科学省「DXハイスクール（高等学校DX加速化推進事業）」の指定を受け、DX人材の育成に着手。さらに、2025年度からは三菱みらい育成財団の助成事業に採択され、現在は、NECプラットフォームズ（株）、旭化成（株）などと連携し、「探究×DX」を掲げて新たな取組を進めている。

校長、教頭と共に本取組を牽引してきた熊谷先生は、その背景や経緯について次のように説明する。

「時代はDXの流れにあり、生徒の将来を考えるとDX人材の育成という視点は不可欠です。生徒には、実際にDXが進む職場環境を見て、そこで働く人たちの話を聞いて、大学の先にどんな世界が広がっているのかを知り、視野を広げてほしいという思いもありました。これを実現するには外部の力を頼るしかないと考え、掛川

富士東高校 しののめ研究 つながるシート

Q.質問・取材の目的は、どのような問いを解決したいのか？

Q.これまでの研究の状況は？ 質問・取材する必要がある？

Q.自分でやるものや一歩踏み出すチェック項目は？

Q.自分ではまだわからないことや、質問・取材したいこと、自分ではまだわからないことや、質問・取材したいこと、自分ではまだわからないこと

氏名(フリガナ) \_\_\_\_\_

学年 \_\_\_\_\_

所属科(フリガナ) \_\_\_\_\_

担当教員(フリガナ) \_\_\_\_\_

調査日(フリガナ) \_\_\_\_\_

調査時間(フリガナ) \_\_\_\_\_

調査場所(フリガナ) \_\_\_\_\_

調査方法(フリガナ) \_\_\_\_\_

調査結果(フリガナ) \_\_\_\_\_

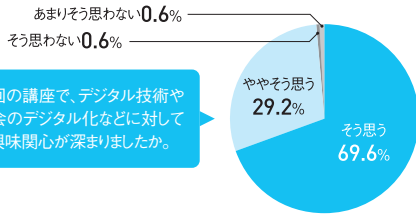
調査の感想(フリガナ) \_\_\_\_\_

調査の気づき(フリガナ) \_\_\_\_\_

調査の課題(フリガナ) \_\_\_\_\_

調査の今後の展望(フリガナ) \_\_\_\_\_

図1「生成AI講座」の生徒アンケート集計結果(一部抜粋)



今回の講座で、デジタル技術や社会のデジタル化などに対する興味関心が深まりましたか。

【アンケートの自由記述より】 ※生徒の回答を生成AIで要約・抜粋。

- 最初は「難しい」「怖い」というイメージをもっていたが、実際に触れることで、「便利な道具」「パートナー」としての認識に変化した。
- 答えを聞くだけでなく、自分の考えを深めたり、人間が手を加えて完成させたりするためのツールであることがわかった。
- 検索、要約、資料作成などのスピードが上がり、勉強やレポート作成の効率が上がった。
- 自分一人では思いつかないアイデアをAIが出してくれることに面白さを感じた。
- 今後の学校生活(探究活動、レポート、調べ学習など)で活用したいと思った。



(上)「生成AI講座」の様子。このときは「富士東高校についてWEBの情報を詳細に調査してレポート形式でまとめ、追加情報を含めて富士東高校のWEBサイトを作る」という課題に取り組んだ。(下)学年末に行われる「成果報告会」の様子。2年生はグループでの取組について発表した。

「しのたんハンドブック」のなかに収められた「つながるシート」。質問・取材の目的や内容、問い合わせ先、チェックリストなどがまとめられており、生徒は外部に連絡する前に教員に提出することになっている。

DXセミナーや生成AI講座の始動を踏まえ、2025年度からは「しののめ探究」のカリキュラムを改訂。3年間のロードマップも描き直した。

1年次のはじめには、探究の基礎を学ぶ。生成AI講座に加え、全生徒に配付さ

は1学期に集中的に行っている。

「生成AIの活用方法を学んだうえで探究学習に臨めるよう、まとめて基礎を学ぶ時間をとりました。実際に生成AIを使うなかで個人情報扱いなどリスクについて学んだり、どういったプロンプトならどういった回答が得られるかを体験したり。全6回終了後の生徒のアンケート(図1)では、講座の評価は非常に高く、生成AIに対する意識の変容や知識スキルの向上が見られ、実際に使うシーンも増えていると感じます」

教員向けの講座も5月に1回行われ、「加えて毎回の講座で、私たち教員も生徒と一緒に学んでいる」と熊谷先生。生成AIの活用についてはポジティブではあるが、「まだまだ模索中」と言う。

「生成AIを使うことで、プログラミングもイラストも文章も、自分ができないことができるようになったり、作業時間が短縮できたりします。しかし、あまりに自分の能力を超えていると、アウトプットに対して正誤判断ができない可能性もあり、常に批判的な視点をもちつつ使う必要があるでしょう。生徒はもちろん、教員側のアジャストも求められると感じています」

テーマや問いを深めるための相手として生成AIを使う姿も

「1年次は、自分でテーマを決め、自分なりの問いを立てることを大事にしています。まずは自分でやってみる、興味のあることを掘り下げてみることを優先しており、教員は口を出しすぎないようにしています。テーマ探いや問いを深めるためのキックボールの相手として、生成AIを使っている生徒もいます」

2年次は、グループ探究に取り組む。生徒の興味・関心を考慮して5名前後のグループに分け、テーマ決めから成果報告会での発表まで、チームで協働する。

「仲間と対話をしながらチームで2つのテーマに取り組み経験をしてほしいと考え、2年次ではグループ探究にしています。2025年度の2年生については、DXセミナーに加えて生成AI講座の二部も受講しました。現状ではDXセミナーが単発の企画のようになっていっているので、探究の流れのなかにかに組み込むかが、今後の課題です」

そして3年次は、2年間の学びを踏まえて自身の進路に向けて探究を進める。どの大学・学部で何を学ぶか、そして、大学卒業後にいかに社会と関わるかといったことを深めていく。

DXセミナーや生成AI講座の始動を踏まえ、2025年度からは「しののめ探究」のカリキュラムを改訂。3年間のロードマップも描き直した。

1年次のはじめには、探究の基礎を学ぶ。生成AI講座に加え、全生徒に配付さ

「本校は、一般選抜で大学を受験する生徒が多く、探究の成果を試験で使うケースはあまりありませんが、今後は総合型選

れる「しのたんハンドブック」に基づき探究の手法を学び、「縦割り座談会」では2・3年生から探究学習の体験談を聞く。その後、個人探究をスタート。9月の中間報告会までに「探究計画書」を完成させ、それぞれのテーマに基づき探究を進める。

「1年次は、自分でテーマを決め、自分なりの問いを立てることを大事にしています。まずは自分でやってみる、興味のあることを掘り下げてみることを優先しており、教員は口を出しすぎないようにしています。テーマ探いや問いを深めるためのキックボールの相手として、生成AIを使っている生徒もいます」

2年次は、グループ探究に取り組む。生徒の興味・関心を考慮して5名前後のグループに分け、テーマ決めから成果報告会での発表まで、チームで協働する。

「仲間と対話をしながらチームで2つのテーマに取り組み経験をしてほしいと考え、2年次ではグループ探究にしています。2025年度の2年生については、DXセミナーに加えて生成AI講座の二部も受講しました。現状ではDXセミナーが単発の企画のようになっていっているので、探究の流れのなかにかに組み込むかが、今後の課題です」

そして3年次は、2年間の学びを踏まえて自身の進路に向けて探究を進める。どの大学・学部で何を学ぶか、そして、大学卒業後にいかに社会と関わるかといったことを深めていく。

「本校は、一般選抜で大学を受験する生徒が多く、探究の成果を試験で使うケースはあまりありませんが、今後は総合型選

「これまででは、大学や企業と本校とが個別につながっていましたが、探究に関わるステイクホルダー同士のつながりを面的に広げたいと考え、コンソーシアムを立ち上げました。互いに活発に意見交換をしながら、探究学習の質の向上や持続可能な実施体制、円滑な連携の仕組みを構築していければと考えています」

加えて、2026年度からは、半導体やAI産業の強化に取り組む台湾との交流事業も始まる。相互の生徒派遣やオンライン交流などを計画 중이다。

「将来を見据えて、生徒に何が必要かどうかのような経験・学びの機会を提供すべきが、常に考え、ブラッシュアップし続けることが大事だと思います。変化を恐れずに新しいことに挑戦していきたいですね。一方、教員の業務過多にならないよう、外部のコーディネーターなどと連携することも大事。持続可能な活動にするにはお金も必要なので、管理職としては、予算確保にも引き続き奔走したいと思います」

「本校は、一般選抜で大学を受験する生徒が多く、探究の成果を試験で使うケースはあまりありませんが、今後は総合型選

## まとめ

### 富士東高校の探究のモットー

DX社会で求められる  
「生きる力」を育成する

#DX人材 #生成AI活用 #リテラシー教育 #外部連携

#### テーマを決めて問いを立て、 「探究計画書」を作成

1年次の個人探究では自分の興味・関心を起点に、2年次のグループ探究ではメンバーと話し合いを重ね、テーマを決めて問いを立てる。さらに、探究の見通しを記した「探究計画書」を作成する。

#### 外部への取材や調査の 事前準備の大切さを伝える

年に数回「フィールドワークDay」を設定。外部に連絡する際は、「しのたんハンドブック」内の「つながるシート」を使い、質問・取材の内容を明確にしたうえで依頼するよう指導している。

### 課題の 設定

### 情報の 収集

### まとめ・ 表現

### 整理・ 分析

#### 成果報告会で発表し、 レポートにまとめる

9月の中間報告会を経て、2月には大学生アドバイザーも参加する成果報告会で発表する。最後は「探究成果報告書」にまとめ、次年度の学園祭でポスター発表を行う。

#### 文献や資料にあたり、 疑問点や課題を洗い出す

1年次にはデータの分析法も学ぶ。「しのたんハンドブック」内の「まとめるシート」を使い、資料の要約、資料にあたって生まれた疑問点や課題、参考文献などについてまとめていく。

#### 探究設計のPOINT

POINT ① アカデミックに  
探究する力を身につける

POINT ② テーマを決め、問いを  
立てることに時間をかける

POINT ③ 実社会と連動した  
探究学習を意識する

#### 評価基準

生徒たちは、中間報告会、成果報告会でのクラスメイトの発表について、4件法（「4（とても良かった）」から「1（もう少し）」まで）で評価。加えて、感想・意見・アドバイスなどの自由記述を、オンラインアンケート形式で回答する。